



留岡幸助

中村 遙

同志社人物誌
(2)

学神学部教授になった人で、学問はできても話は余り上手であったとは思われない。然しその話の内容は幸助の胸を打った。『神さまは人類を平等に作り給うた。したがって神さまの前には士族と平民の身分の相違はない、神を信する者は平等で皆神の子となることができる』と。生来負けじ魂の強い少年幸助氏の胸にグツと来るものがあつた。神の慈愛の光りはかすかではあるが強く照り初めたのであつた。

数年前フランスより近世日本における四人の社会事業功労者をたずねてきたことがあつた。その時厚生省は種々の観点よりこれを調査したる結果、石井十次氏、留岡幸助氏、山室軍平氏、岩橋武夫氏を推薦した。

しかもこれら四人の人々はいずれも基督教界がわが国に送り出した社会事業における開拓者達であつた。また不思議なことにこの中の二人までが、岡山県の山間部に近い極めて質素な家に生まれ至極平凡な家庭で育てられた人達であつたことは不思議とさえ言えよう。

ここで論じようとする留岡幸助氏も岡山県

高粱の貧乏な家庭に生れ、姓を吉田と呼んでいたが、故あつて米屋の留岡金助の養子として迎えられた。留岡家ではすでに家付の夏子さんがいたので、ゆくゆく養子にするという親同志の約束で幸助氏は留岡家に育てられる身となつた。

米屋の小僧の幸助氏は生来講談とか浪花節が三度の米の飯より好きだつた。ある日のと岡山門田屋敷にいる毛唐の講談師が高粱にきたというので喜んで聞きに行つたら、話の筋書が一寸違つて基督教の説教であつた。話をした人物は二十才台のオーテス・ケリー宣教師であつた。ケリー師は今の同志社大学教授のオーテス・ケリーの祖父で、後に同志社大

彼の心に入信の双葉が植付けられた。米屋のせがれの幸助も士族の息子も平等であると言ふ言葉程、日頃頭をさげ通しの幸助氏の心を打つたものはなかつた。その後ある日のこと新しくできた町の学校で士族の息子からケンカを吹きかけられたとき、彼の胸の中ではムラムラとカンシヤク玉が破烈し猛然と反抗心が燃え上つた。ヨシ売られたケンカなら買うぞ!! 彼は遂に立上つた。根性の確りした少年幸助は逆にボンボンと士族の息子をまたたく間にのして仕舞つた。幸助少年にとつては全く流飲のさがる思いであつた。しかし彼が家に帰るとケンカに敗れた泣き虫士族の息子の親父が、彼の義父金助に強談判におよ

んでいた。

九拾年も昔の話である。士族と平民は身分が違った。ついに留岡家は御出入禁止となった。明治初年の当時のことと一軒のお得意が少なくなった程度ではなかった。養子幸助は親父金助にさんざん折カンされた後、裏長屋のハリに両手をしばられてぶら下げられてロクに食事さえ与えられなかった。その時彼の両手の縄をきって逃がしてくれたのは、いと可憐なやさしい夏子さんであったことは彼の一生の語り草である。彼女は彼の初恋の娘であり、また幸助氏と生涯の良き伴侶者であった。

二

幸助少年は裏長屋から夜陰に乗じてコッソリ家出し行方をくらしましたが、行く先は岡山市門田屋敷のケーリ師の住居であった。しかしここは高梁も近いので、親父金助が必ず後から追かけて来ることも必定であり、ケーリ氏は彼を今治の伊勢時雄氏のもとに送った。ここでも彼は米屋の丁稚をしながら教会の会合に出席した。彼は生涯で二度も米屋の丁稚をした。

しかし彼は平凡な今治の米屋で果てるに余

りに開拓的精神を持ちすぎている。彼は遂にキリスト教伝道に生涯を捧げんと決心し、明治十七年、伊勢時雄氏の推薦により同志社の別科神学校に学んだ。当時同志社は本科神学と別科神学と二つあった。本科は普通学校を卒業し一応語学の素養のある人たちのコースであったが、別科神学は、伝道心はあっても学問的素養においてやや劣っているが将来伝道師たらんとする有志を入学せしむる制度であった。したがって別科神学生は年齢的にも種々であつて、本科生はこれらの人々を呼んで『オコゼ』と言った。

オコゼは魚類の中でも一寸変わった存在である。親父のような顔付きでハダざわりが良くない。本科神学のボンボンたちには頗るケムたい存在でもあったものと思われる。留岡幸助氏がここで学んだ初期は新島先生御存命時代である。それ故彼は校祖新島先生に直接に指導を受けた人材の一人と言えよう。

彼が卒業の頃には校長は小崎弘道師であつた。彼は卒業と同時に小崎校長の推薦を得て明治二十一年丹波教会を牧するにいたつた。しかし彼は聖書ヨハネ伝の光りは暗きを照すくと言ふ詞に導かれ遂に明治二十四年意を

決して北海道空知監獄の教誨師となり、逆にわが国監獄改良事業の先駆をなすにいたつたのである。当時におけるわが国の監獄は全く獄屋であつた。人間の罰に対する報いとして創設された罪人の牢獄であつた。

人類の罰の身代りとなつて十字架の死を遂げた愛の化身イエスを信ずる留岡幸助にとつては、死刑囚であつても、神の子の一人であつた。彼の信仰と愛情は監獄改良に向わざるを得なかつた。彼は罪人が当時の監獄で悔い改めて善人となると思われなかつた。損なわれたる人格は神と人との愛情によつてのみ更生されることを、彼は同志社で学ぶことによつて十分に知らされていた。その後の働きはわが国における少年感化事業に巨大な足跡を残し、監獄改良事業に貢献するところ、大なるものがあつたが、彼は意を決して職を辞し、渡米しニュー・ヨーク州エルマイラ感化刑務所および、マサチューセツ州コンコルド感化刑務所において、囚人とともに労務にしたがいつつ囚人の心理を学び、また彼が志した監獄改良のことについて研鑽を重ね、二十九年帰国した。彼は帰国早々三十年には東鴨監獄教誨師に任せられたが、日ならずして新

知識を有する彼を政府は警察監獄学校教授に任命し、刑事沿革史、感化事業、釈放者保護等を講じた。更に彼は明治三十三年内務省社会局より社会事業の指導者として囑託に迎えられたが、彼の理想を大いに語らしめる機会をえた。しかし彼は内務省の一官吏を以て満足せず、明治三十一年東京巢鴨に家庭学校を創設し、少年感化事業の開拓者としての一步を踏み出したのであった。しかし彼の道は決してタンタンたるものではなかった。現代のごとき国家の施策として社会保障の推進されつつあった時代との大差は言うまでもない。

内務省で貰った月給袋は家庭学校として自宅に収容している少年達の飯代には余りに少なすぎた。ときには募金に歩くのも彼の重大な仕事の一つであった。彼は子福者でもあった。生めよ増せよは彼の家の信条であったものと思われ、遂に自分の子供の数も八名になった。彼が貧乏のドン底にある時、彼の初恋の人、彼の良き伴侶者夏子夫人は美しくい信仰を持ちながら遂に昇天した。彼は彼の家庭学校のもっとも良き理解者であった。大きく子供を迎えた。貧乏とはシヨセン緑の切れない彼であったが、一度決心すれば岩をも貫く程

の強い信仰の持主であった彼はますます祈り、また強く信じて彼の道を堂々と歩んだ。

三

彼は内務省の若い役人達に時々、ホラ吹きのごとくにさえかげ口されたが、それでも彼は彼の信念を卒直に語ることを断じて遠慮はしていなかった。彼は表面極めて温厚な教養ある文化人であったが内に秘められた烈たる信念は、動かすべからざるものがあつた。彼は鍛えられ鉄のような、時にはハガネのような人物であった。しかも他面実に忍耐強い人であった。

彼は月刊「人道」を発行しこれを以て家庭学校の機関紙とし、また広く天下社会の教化に資さんとしたが、その他に彼の著書としては『不良少年感化事業』『社会と人道』『明暗判記』『慈善問題』『自然と児童の教養』等が広く知られているが、彼の監獄改良事業にはかくれた陰の人が三人いた。一人は有馬四郎助氏であるが、他の二人は元同志社総長牧野虎次氏と生江孝之助氏である。

牧野氏は彼より七年の後輩であるが、留岡幸助氏の没後、彼の後を継いで二代目家庭学校の校長に就任した。また彼が高知教会伝道

師の頃、高知出身の、時の内務大臣板垣退助氏に、高知の巨人坂本龍馬の実弟坂本良寛の東上に際し一文を托し、留岡幸助氏を推薦し、監獄改良に関する意見書を彼とともに板垣に提出せしめ、以つてわれわれの新らしき施策となさんと志したるがごとき彼の協力にまつものが多い。惜しいことには彼の家庭学校々長時代は僅か数年に過ぎない。しかし後輩の今井新太郎氏を後任校長に推し今なお彼の良き協力者であることは全く彼のすぐれた人柄のいたすところである。

生江孝之氏は留岡幸助氏の推薦によるわが国最初の地方公務員として社会事業のことに当るべく兵庫県に赴任した。後、転じて彼もまた内務省囑託となったが、彼は留岡と相たずさえて欧州に見学したこともあり、また時の東京都知事井上友一氏のかかれたる社会事業の良き助言者として、また日本女子大学における社会事業の担当教授として、わが国の社会事業界における功績大なるものがある。

有馬四郎助は横浜家庭学校の創設者であるが、留岡幸助氏が雲南坂教会教師時代に、彼より洗礼を受けた人であつて入信後、留岡氏と志を同じくし、わが国の監獄改良事業に生涯

を捧げ、財団法人幼年保護会の創設者も彼である。また小菅家庭園の設立者も彼である。しかし彼のこれらの業績の後に必ず先輩留岡幸助氏がいた。留岡氏は時の都知事井上友一氏の社会事業行政における顧問格でもあった。

彼はホラ吹きと冷かされても、彼の胸中に燃えた人類愛の燈火は消すこと能はず、彼の愛は死刑囚にまでおよんだ。彼は、彼の家庭である巢鴨の家は八人におよぶわが子と、愛情にうえたる少年たちと、全く何のわけへだたりもなく、一つ釜の飯を食べて育てた。

彼の夫人と彼の妻子にとっては悲しいことも辛いことも多かったであろう。しかし彼の愛情と信念は幸薄き子供達のためにこそ必要でありまた彼の信仰は彼の家庭が、キリスト愛の実践の場であった。彼は後添えの夫人を励ましつつ、神よりの召命のままに生涯を貫いて戦いつつ倒れた人生であった。

四

彼は全く徹底した信念の持主であった。世に言う三ツ子の魂百までと言う詞のごとく、幼少の頃士族のドラ息子を投げ飛ばして親父に怒られた時も、心の中で断じて承服できず遂に自由の天地を求めて家出した。彼の負け

じ魂は彼の生涯を貫いていた。彼は一たん決心したら断じて貫き通す熱とネバリの持主であった。彼の友人には満洲における社会事業の父と呼ばれる大塚素氏、救世軍の生みの親山室軍平氏等があるが、彼の事業の援助者には小林寅次郎氏、森村市左衛門氏、大久保利武氏、小倉正恒氏、中川望氏等をあげねばなるまい。しかし彼はこれらの人々にヒザを屈して救を求めたとは思われない。彼は時の内相板垣退助氏に監獄改良の必要なることを進言し、その後もしばしば会見を求めているが、彼は十分に尊敬していたとは言え彼の眼中には時の内府さえ、さ程の人物とも思われていなかった。ただ彼にとっては彼の施策をわが国に実現する道具に過ぎなかった。しかし彼は神の召命の前にのみただただひざまずくのみであった。彼を内務省の役人などとして上手に世の中を泳ぐ人のごとくさえ見る人は、全く彼の真意を解せざる人であって、彼はよく忍耐し年若い役人達とも協調し、彼の理想を広く天下に知らしめわが国における社会改良に資さんことを志す一念にこりかたまっていた。役人のポストはいわば彼の手段として使われたものに過ぎなかった。彼の生涯は純粋

な伝道的生涯であった。

伝道師に子供多ければ貧乏するのは定石である。しかし彼はまた子供に恵まれた人でもあった。清男氏は彼が北海道で創立した仕事を継ぎ、幸男氏は警視総監にまで栄進した。

また彼は大正三年功績の故を以って銀盃・並びに同四年藍授褒章を授与された。更に大正十五年慶福会終身奨励金を授与され、更に勲五等瑞宝賞を賜わる。彼の名はわが国社会事業界に不朽と言うべきか。

留岡氏が残した家庭学校の仕事も、今は児童福祉法による養護施設として現校長今井新太郎氏により第三代目が立派に継承されて今日に到っている。北海道における令息清男氏の事業は言うにおよばず、東京家庭学校長今井新太郎氏は彼の母校と同じくする同志社マンにしてしかも今ではわが国における斯界の重鎮である。また既に元老格でもある。立ちて詩を、吟ずれば満堂を圧する。迫力がある。彼留岡幸助氏昇天して三十年。彼の理想は国の施策の上にも着々実現しつつあるのが現代と言えよう。以て天にある留岡幸助氏の霊もメイすべきである。(大阪水上隣保館々長、見出しの署名は大久保利武氏の筆)